

琉球大学学術リポジトリ

[書評] 赤嶺政信著『歴史の中の久高島：
家・門中と祭祀世界』

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小熊, 誠 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/43832

[書 評]

赤嶺政信 著

『歴史の中の久高島——家・門中と祭祀世界——』

慶友社 2014年 454 ページ

小 熊 誠*

赤嶺政信は、久高島を30年以上もの時間をかけて実地調査し続けてきた。「あとがき」にも書かれているが、赤嶺が本格的に久高島の調査を始めたのは、筑波大学大学院地域研究研究科に提出するための修士論文を書き上げるためであった。(私事で恐縮だが、同時期に評者も同級生として一緒に修士論文に取り組んでいた。そして、赤嶺氏の下宿で、炬燵に足をつっこみながら、修論について語り合ったものである。)

その修士論文は、「沖縄久高島の『門中』制——久高島村落祭祀組織理解のための予備的考察——」として日本民族学会(現在、日本文化人類学会に改称)の学会誌『民族学研究』47号4巻、1983年に掲載された、秀逸な修士論文であった。その調査方法と研究視点は、それまで赤嶺が指導を受けてきた文化人類学に則ったものであった。当時、沖縄における門中研究は、日本の文化人類学や民俗学、とくに当時の東京都立大学における社会人類学の研究者によって盛んに研究されたテーマであった。この件は後述するが、文化人類学的視点で始められた赤嶺の久高島研究は、その後民俗学的方法と研究視点に傾いていった。

文化人類学と民俗学の方法と研究視点の違いについては、多くの専門的な解説がある。ただ、沖縄研究については文化人類学者も民俗学者も、渾然一体となって調査をし、議論を戦わせてきたという、他の地域研究ではあまり見られない特徴をもっている。赤嶺の研究に則して文化人類学から民俗学への変更を考えると、以下の2点を指摘することができよう。

まず、通時的な視点の導入である。民俗学の歴史的な研究に関する方法論についての島村恭則による最新の解説によると、民俗学研究の方法論として、もっとも根幹的なものは、「『現在』の事象を『過去』との照合によって解析する視点である」と述べられている。さらに、「歴史学では、特定の時代の社会や文化のあり方の再構成や何らかの事象の起源の解明が第一義的な目標になって」いるのに対し、民俗学では「『過去』との照合によって『現在』の成り立ちのあり方を解くことが、もっとも基盤的な方法論」であると指摘されている[島村2014:7頁]。つまり、民俗学では、現在を知るためには過去を調べないと分からないという考え方が柳田国男の方法論からあり、そのために通時的に資料を集め、調査をし、その変遷を解明するということになる。それに対して、文化人類学では実地調査を中心とした資料による現時点の現象を調べ、それを解明することに主眼が置かれ、歴史資料などを利用した通時的な社会や文化の研究にはあまり興味を示さないという違いがある。

もう1点は、文化人類学理論による分析である。赤嶺は、門中研究に対して、単系出自集団としてのリネージ理論を用いて門中がどのように分析できるとか、あるいは父系血縁の強調による祖先の組み換えがシジタダシとして行われ、それが知識人類学の理論でどのように分析できるか

* 神奈川大学教授 Professor, Kanagawa University

というような文化人類学の理論での分析の場として久高島を扱わなかった。赤嶺は、あくまでも久高島に生きる人々とその人々の間に生み出された民俗を研究対象とし、その人々の中で生きている民俗を描くことに力点を置いた。文化人類学的研究やその成果としての論文は、被調査者とはあまり縁のない学術的な理論で研究者が学会に向けて発信する。それに対して、民俗学では被調査者も読むことができる言葉と内容で研究者は調査した内容を書く。そして、調査者と被調査者とが対話し、その両者の相互関係を大切にするという研究スタイルをとる。

このような傾向を色濃くもつのが、「民俗誌」と言われる著作物である。本書『歴史のなかの久高島』は、まさに久高島の民俗を描き出した「民俗誌」であり、現在ある久高島の家・門中と祭祀組織に関する歴史的経験を、聞き書きという手段を中心にして明らかにしようとした、民俗学の著作となっている。

その内容を検討する前に、本書の目次を記しておく。

序論 本研究の課題と方法

第一章 本研究の課題と方法

第二章 歴史の中の久高島

第一部 久高島の家・門中と祭祀世界

第一章 久高島の家と地割制

第二章 久高島の祖霊観念・祖先祭祀と家の態様

第三章 久高島の門中の実態とその特徴

第四章 久高島の祭祀組織の特徴

第五章 久高島の村落の祭祀世界と門中

第二部 久高島の祭祀と国家制度

第一章 イザイホウと国家制度

第二章 八月行事と国家制度

第三章 ナーリキ(名付け)と国家制度

第四章 門中化現象に見る久高島の社会史

本研究のまとめと展望

本書は、大きく二つの内容に分けることができる。第一部の「久高島の家・門中と祭祀世界」と第二部の「久高島の祭祀と国家制度」である。

前者は、前述した赤嶺の修士論文が基礎にある。もちろん、本書の論考はそれを大きく展開させたものである。修士論文で赤嶺が指摘したことは、久高島では門中が成立したのはそれほど遠い過去のことではなく、その門中イデオロギーが久高島に入ってきたのは近年における沖縄本島のユタの影響によるものであったということである。この傾向は、沖縄本島や周辺離島でも時代の差がありはするものの、ほぼ同様の傾向があったことを示す多くの調査研究がある。しかし、その門中制が形成される以前は、久高島土着の「ムトゥ神制」が基盤にあったことの指摘は重要だと思われる。そして、修論では、将来の研究の展望として、門中成立以前の村落構造や祭祀組織の形態を実証的に調査し、それによって久高島の村落組織における門中やムトゥ神の位置づけを明確にして、久高島における村落組織全体の理解を進めるべきだと述べている[赤嶺 1983: 354-355頁]。そこで述べられた研究課題にしたがって忠実に調査研究を継続し、長期間かけて久高島の「民俗誌」としての本書に繋げている点は敬服に値する。

沖縄における門中研究は、門中化というテーマが大きく存在してきた。いわゆるシジタダシで、父系血縁を重視してその家系の祖先と子孫を統合的に結びつけるという考え方である。この父系血縁を重視した家の継承に関わる概念は、新しく外から導入されたもので、それにはユタが関与しているということが沖縄本島および周辺離島の調査で明らかにされてきた。久高島では、その近年の変化を明確に追うことができ、赤嶺はそれを詳しく調査している。

この門中化の議論は、笠原政治によって「門中化のカミソリ現象」と「門中化によるビリヤード現象」という表現でまとめられており、本書でもそのまとめを援用している。確かに、久高島でも父系血縁重視の概念が導入されて、新たな父系血縁集団としての門中が形成されている。前者の現象は、父系血縁重視の概念の導入によって、それ以前に存在した系譜の組み換えが行われ、従来から継承されてきた祖先祭祀集団が寸断されて新たなものへ移行していく現象をとらえたものだが、久高島ではそのようなドラスティックな祖先関係の組み換えが行われたというわけではないと考えられる。むしろ、久高島では地割制が戦前まで残ったことも関連して、家の系譜が流動的で非永続的であり、祖先中心的に組織された出自集団が近年成立した門中組織以前に存在しなかった点が本書で指摘されている。とするならば、久高島における門中の成立は、近年から現代に至る久高島での大きな社会変化のなかで父系血縁を重視する新たな組織として門中が成立したととらえたほうが、この研究の新たな展開に通じると考えられる。

また、「門中化によるビリヤード現象」としてとらえられる現象は、父系血縁を重視する門中へ移行する際、門中を形成する家間の集合離散や系譜関係の再編成が行われるだけでなく、そのことによってノロや神役を出す家筋が変化したり、他の集団や組織にも変化の影響を及ぼしたりすることを表現している。本書によれば、久高島における門中の形成が、ムトゥ神の移動や門中での祭祀など他の組織や儀礼に玉突き的に変化を及ぼすことを指摘している。この視点は、有効である。しかし、ビリヤード現象があるという指摘だけでは、せっかくの久高島における門中化の特殊性をさらに深めることにはならない。

久高島における門中化の特殊性をさらに追及するためには、本書でも言及された [402 頁、405-406 頁] 比嘉政夫の門中研究に関する指摘を再考することが重要だと考える。つまり、「祖先にこだわり、自分を生み出した根元的なものに結びつこうとして、さまざまな系譜のなかから自分と結びつく確かなものを求め」[比嘉 1986: 9 頁] することが自己確認にとって証になるということである。この視点は、従来の社会人類学が進めてきた門中化研究から、新たな視点での門中研究に発展する可能性を含んでいる。

社会人類学を中心とした門中化の研究は、1980 年代以降大きな進展はない。しかし、それ以降の門中の研究は、さまざまな方向に展開してきている。一つの包括的な視点は、沖縄における門中の在り方は、大きなヴァリエーションがあるという点である [小熊 2001]。従来、士族系門中と百姓系門中の区別が言われ、その歴史や組織が異なる事が指摘されてきた。さらに、首里・那覇の士族門中の原則（と多くの研究者によって考えられてきた）である父系血縁重視の原則が沖縄本島およびその周辺離島に広まり、門中化が引き起こされているといういわゆる「門中のスプロール現象」が指摘されてきた。しかし、門中化に関するこの一般的な見方は、その後の門中研究の中では正確でないことがわかりつつある。

まず、士族系門中と百姓系門中という二つの区分は、その歴史的来歴からは区分できるし、一般の人びとの間にもその区別は認識されているが、門中全体の研究を進めようとする場合は、その区分だけではとらえられない部分がある。例えば、士族系門中を見ても、必ずしも父系血縁で系譜が貫徹しているわけではない。家譜を見ても、琉球王府時代にも父系継承だけでなく、婿

養子や母方・妻方の非父系養子、さらには血縁関係のない非血縁養子すらある。それを現在の子孫はわかっているが、だから門中化のようにそれを父系出自の祖先に組み替えようとはしない。それはそれとして、自らの門中系譜と認めている。また、久米村系士族門中の一部では、門中を法人化して運営する。さらに、屋取集団の門中が、自らの門中集団を形成し、さらに本家の門中集団と近年関わり、そこに加入していくなど、士族系門中の中だけでも現在はさまざまな動きを見せている。紙幅の都合で、百姓系門中の変化については言及しないが、その地域によって、極言すればそのシマごとに門中化の影響によってどのように変化していったのかは異なっている。

地域ごとの門中を子細に見ていくと、「門中のスプロール現象」と単純化できない多様な門中が存在する。このような多様な門中をどのように研究するかという視点は、先述した比嘉政夫の指摘が有効だと考えられる。つまり、人びとは「自分と結びつく確かなもの」を求めており、それは地域と時代によって変化していくものであり、その変化をとらえていくことが重要ではないかと考える。この視点は、文化人類学においても、「つながり」という概念で新たな研究が始められている〔高谷・沼崎 2012〕。1980年代以降、人類学の分野で親族研究が行き詰まりをみせており、それと呼応して門中化の研究も進展が見られなかった。単系出自集団やリニージという概念による分析に限界がみられた。しかし、実際には人びとは何らかの「つながり」を求め、それを形成している。その「つながり」は父系とか母系という観念だけでとらえることができるとは限らないわけで、その「つながり」の本質をその地域で分析するという新たな親族研究の流れである。

本書の提示した久高島における門中化に関する調査研究は、新たに形成された門中だけでなく、それに関わる祖先祭祀儀礼や村落祭祀も含んで厚い記述である。さらに、門中形成と祖先祭祀に関して沖縄本島との関連も記述されている。久高島の門中に関してさらに深い研究を指向することは可能で、新たな「自分と結びつく確かなもの」あるいは「つながり」の視点による研究の発展が期待される。

二つ目の本書の大きな研究方法として、民俗研究の歴史的視点があげられる。この点は、赤嶺による30余年にわたる久高島研究の過程で大きく展開した研究成果と位置づけられよう。

久高島の伝承や祭祀は、豊かな民俗社会を形成している。久高島のイザイホウは、他に見られない琉球開闢の神話と琉球王府の宗教儀礼と結びつく豊かな信仰と内容を含む祭祀儀礼であり、民俗学だけでなく多くの分野からの膨大な研究蓄積がある。それを久高島に限定した微視的な分析視点ではなく、琉球王府との関連を歴史的にとらえることによって、「神女就任儀礼としてのイザイホウ」理解から、「王国時代の久高島の女性たちが聞得大君に使える役目に就くにあたり、国王が神女としての認証を与える辞令交付式という性格を帯びた国家的な祭祀であった」〔313頁〕という解釈を導き出した。この点は、イザイホウ研究を新たな解釈で展開した点で評価されるだけでなく、沖縄における民俗研究において国家制度と民俗の新たな研究視角と研究方法を展開させた点が高く評価できよう。この視点での研究では、第二部第二章の「八月行事と国家制度」および第三章「ナーリキ(名付け)と国家制度」でも成功している。

これらの論考は、赤嶺が高良倉吉や豊見山和行など近年の琉球史研究者と交流する中で生まれてきたものと考えられ、民俗学と歴史学の協働が沖縄研究でも重要であることを示している。とはいえ、柳田国男や折口信夫らによる初期の沖縄研究では、歴史的文献も多用されていた。それが、1960年代以降における社会人類学の調査研究において、実地調査を重要視する研究方法が隆盛し、民俗研究の分野でも歴史的文献をあまり利用しない研究が多かった。その中で、平敷令治は墓や位牌祭祀の研究で、琉球王府時代の文献をきちんと押さえ、現代の民俗に至る歴史的な研究を行っていた〔平敷 1995〕。社会人類学出身の比嘉にしても、家譜という文献を利用して門中分

析をしようとしていた[比嘉 1983]。沖縄民俗の歴史的な研究は、沖縄の中ですでにあったわけで、本書で提示された久高島における民俗の歴史的な研究は、その流れをさらに推し進めたということができよう。

沖縄の民俗を歴史的に見ていくと、琉球国家の政策とそれが人々の生活に影響を与え、その影響が民俗としてどのように存続し、その民俗が現代にもどのような形で存在するかという研究視点の提示も、本書の結論部で大きな意味を持っている。この研究視点は、前述したように平敷や比嘉の研究にも包含されていた。評者も、近世琉球において行われた村落移動が風水思想を取り入れた琉球王府の政策として行われ、それが一般の人びとに受け入れられて人々の生活に風水が浸透していったことを琉球王府の政策と民俗の形成に関連させて論じている[小熊 2011]。

ただ、久高島は琉球王国時代の国家的聖地であり、国王や聞得大君の行幸が行われ、直接琉球王府と深い関係をもつ特殊な島である。イザイホウなどその特殊な島で伝承された特殊な民俗も多くあり、それについては琉球王国と久高島の関係という歴史的な研究視点で新たな分析が行われた。また、地割制が戦前まで残るウミンチュの島で、久高島の家には、近年まで祖霊祭祀のための祭壇がなく、祖先祭祀をめぐる琉球王府の政策がほとんど浸透していなかったという社会的特殊性も持ち合わせる。このような久高島の社会と文化を、本書では「民俗誌」という方法で厚く記述している。その記述は、単なる記録としての記述ではなく、この小さな島の民俗から沖縄社会全体の研究に繋がる視点と方法を持った記述であり、クリフォード・ギアツの言う「厚い記述」である。

本書では、赤嶺による民俗研究の一つの到達点を示している。しかし、門中化を見てみても、久高島と島外の宗家との関係や門中の祖先祭祀の創出が、久高島の人々の生活にどのような変化と意味をもたらしたのか。現在の民俗を歴史的に解き明かす現代民俗学の新たな手法で、これからは著者が久高島の研究を続けることが期待される。

参考文献

- 赤嶺政信(1983)「沖縄久高島の『門中』制——久高島村落祭祀組織理解のための予備的考察——」『民族学研究』47-4頁、慶友社、東京。
- 小熊誠(2001)「記録された系譜と記憶された系譜——沖縄における門中組織のヴァリエーション——」筑波大学民俗学研究室『都市と境界の民俗』吉川弘文館、東京。
- (2011)「沖縄の村落移動と風水——村落史の記憶と歴史的事実——」『歴史と民俗』27頁、神奈川大学日本常民文化研究所。
- (2014)「“間”の民俗——養子制度から沖縄の門中を再検討する——」『歴史と民俗』30頁、神奈川大学日本常民文化研究所。
- 笠原政治(1989)「沖縄の祖先祭祀——祀る者と祀られる者——」渡邊欣雄『祖先祭祀』凱風社。
- 島村恭則(2014)「フォークロア研究とは何か」『日本民俗学』278頁。
- 高谷紀夫・沼崎一郎編(2012)『つながりの文化人類学』東北大学出版会。
- 比嘉政夫(1983)『沖縄の門中と村落祭祀』三一書房、東京。
- (1986)「門中研究の展望」多和田真助『門中風土記』沖縄タイムス社、沖縄。
- 平敷令治(1986)『沖縄の祖先祭祀』第一書房、東京。